

* 胃がんリスク検査について *

胃がんリスク検査を有効なものにするために



胃がんリスク検査を受診する前に必ずお読みください

胃がんとは

胃がんは、胃壁の最も内側の粘膜内の細胞が、何らかの原因でがん細胞になったものです。胃がんの発生は、喫煙や食生活などの生活習慣や、幽門部に好んで生息するピロリ菌(ヘリコバクター・ピロリ)の持続感染が深くかかわっています。また、ピロリ菌感染によって胃粘膜の萎縮が進むほど、胃がんが発生しやすくなります。

胃がんリスク検査って何？

胃がんリスク検査は、胃がんそのものを見つける検査ではありません。血液検査でピロリ菌感染の有無(ヘリコバクター・ピロリ抗体検査)と、胃粘膜の萎縮度(ペプシノゲン法)を調べ、胃がんになりやすい状態かどうかの危険度をA~Dに分類し判定する検査です。現在研究段階にあり、あくまで「胃がんのなりやすさ」を調べる検査になります。検査結果に基づき適切な対応を行うことで、胃がんの予防・早期発見・早期治療をめざします。

ペプシノゲン

ペプシノゲンとは胃粘膜で作られる物質で、ほとんどは胃の中にありますが、一部は血液中に流れ出します。血液中に流れ出たペプシノゲン量を測ることで、胃がん発生との関連性がある『萎縮性胃炎』の進行度を調べることができます。一般的に、ペプシノゲン量が少ないほど萎縮性胃炎が進行し、胃がんなどの病気を引き起こしやすい状態となります。

ピロリ菌

ピロリ菌とは、胃の中に生息する細菌です。乳幼児期に感染し、慢性的に感染が続くことで、胃がんの発生との関わりが強い『萎縮性胃炎』、胃潰瘍・十二指腸潰瘍といった病気が起こりやすいとされています。また、成人してからのピロリ菌の慢性的な感染はほとんどないと言われています。ピロリ菌は、抗生物質などの投与によって除菌治療を行うことも可能です。

ただし、下記の1~5の項目に該当する場合は、検査の結果が正確に出ない・または治療が優先される等の理由により、かすみがうら市胃がんリスク検査の対象外となりますので、ご了承ください。

1. ピロリ菌の除菌治療を過去に受けたことがある
 2. 食道・胃・十二指腸に関する疾患で、経過観察中または治療中である
 3. 胃を切除したことがある
 4. 腎不全である
 5. 逆流性食道炎の治療などで胃酸の分泌を抑える薬(プロトンポンプ阻害薬:タケプロン、オメプラール、パリエット、ネキシウム、タケキャブなど)を検査日の2か月以内に服用した
- また、医療機関での問診の結果、かすみがうら市胃がんリスク検査の対象とならない場合もありますので、ご了承ください。

○結果について○ 胃がんリスク検査を受診した医療機関から結果の説明があります。

精密検査が必要「B」「C」「D」と判定されたら

※必ず精密検査を受けましょう

ピロリ菌の感染(またはかつての感染)や胃粘膜の萎縮がある「B~D」の方には、精密検査(胃内視鏡検査=胃カメラ)を受けていただき、その後の対応について医師と相談してください。

* ご不明な点は、医療機関にお問い合わせください。

「A」と判定されても

※自覚症状があれば早めに受診しましょう

「A」の方は、胃がんになる危険度が極めて低いため、精密検査は必要ありません。ただし、どんなに優れた検査であっても100%の精度ではありません。何らかの自覚症状に気づいた場合には、速やかに医療機関を受診してください。

ピロリ菌除菌後も

胃がん発生リスクは低下しますが、ピロリ菌除菌後に胃がんになる方も少なからずあります。除菌成功後も定期的な内視鏡検査が必要です。